

KODOMO ラムサールの意義と実践

○中村大輔（草津市立笠縫東小学校）、中村玲子・武者孝幸・長江珠子・小澤章子・市川智子（ラムサールセンター）、安藤元一（東京農業大学）、川嶋宗継（滋賀大学）

<はじめに>

ラムサールセンターは、ラムサール条約がめざす湿地の保全と賢明な利用の普及啓発に取り組む NGO で、1990 年に設立された。会員約 120 人の任意団体である。

2006 年から、「ラムサール条約を子どもたちのものに」をスローガンとした「KODOMO ラムサール湿地交流」事業を進めてきた。身近な湿地活動へ参加をうながす環境教育であり、全国の子どもたちの経験交流、ネットワークづくりをめざした。

ここでは、3 か年にわたって開催してきた「KODOMO ラムサール」を総括し、その意義を再認識し、そしてこれに続く事業「KODOMO バイオダイバシティ」について報告する。

<経過と実践>

2005 年のラムサール条約締約国会議 (COP9、ウガンダ) に参加した日本の湿地で環境活動に熱心に取り組んでいる 4 人の子どもの思い (私たちの経験をもっと多くの子どもたちと共有し、湿地保全のために活動していきたい) から、「KODOMO ラムサール」はスタートし、これまで全国で 9 回開催してきた。

- ・2006 年度：濤沸湖（北海道）、宍道湖・中海（島根県・鳥取県）、佐潟（新潟県）、漫湖（沖縄県）
- ・2007 年度：琵琶湖（滋賀県）、宮島沼（北海道）、宍道湖・中海（島根県・鳥取県）
- ・2008 年度：谷津干潟（千葉県）、佐潟・瓢湖（新潟県）

この 9 回の「KODOMO ラムサール」には、日本のラムサール登録湿地 33（2008 年 COP10 以前）のうち 29 湿地から、550 人の子どもが参加した。その成果は 2008 年 10 月 28 日、韓国昌原市で開催された COP10 開会式に 18 人の子ども代表を派遣し、メッセージを発表した。

「KODOMO ラムサール」は、各地の湿地セン

ターや NGO、行政機関などから広報され、湿地でエコクラブやボランティアをしていた子どもたちの意思による自由参加で、学年、年齢、性別に制限はなく、小学高学年～高校生の混合グループ式で、1泊2日～3泊4日の合宿形式でおこない、各地の湿地へ出かけ、みんなで体験を共有してきた。

プログラムは、湿地生態系や野生生物の観察と現地の専門家講師を招いての学習と、各自の湿地についての研究・活動報告のほか、湿地の保全、賢明な利用のためにできることのグループ別と全体によるディスカッションなどから構成されたが、「KODOMO ラムサール」の最大の特徴は、最後に、子どもたちだけで考える「子どもメッセージ」づくりである。

例えば、2008 年の新潟では「湿地がある 命がある ぼくらがつなげて宝になる」というメッセージをつくった。

<考察>

国際条約の国内への実施にあたって史上初の試みとなった「KODOMO ラムサール」は、湿地保全・環境学習の推進の面から新しい方法論が展開でき成果が上がったと評価している。全国で 9 回、北海道から沖縄まで 29 の湿地から 550 人の子どもたちが参加した成功の要因はどこにあったのか。計画づくり、目標設定、プログラム内容、混合グループ方式と子どもリーダーの合宿と体験交流、実施コンセプト、ファシリテーターの役割、一人 3 分・パワーポイント 3 枚スライドによる発表の一律方式、メッセージづくりなどについて総括し、参加型環境学習、特に体験学習の大切さを強調したい。そして、その支援のために、各湿地における指導的役割を担う人材養成、育ちつつある子どもリーダーに活躍の場の提供、次に続く子どもたちの育成といった課題について議論し、「KODOMO バイオダイバシティ」につなげたい。